

---

# 優しい嘘

池碧葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優しい嘘

### 【Nコード】

N2936U

### 【作者名】

池碧葉

### 【あらすじ】

幼い時から、近所に住んでいる幼馴染に片想いをしていた加奈、学生時代は、想いを告げれずそのまま社会に出て行ってしまった。社会に出てから幼馴染に再会をした加奈は、想いを告げれるのか…

成人してからの恋愛になりますので、R15には引つかかるかな？  
初投稿になりますので、お手柔らかに願います。

## 想い

君に対しての想いに気づいたのは、小学生の時だった。

小学生高学年になって、クラスが別になり、人づてに好きな子がいて、付き合い始めたと聞いた。

家がかい同士だったので、距離を置こうと朝も挨拶を交わすだけになった。それから、お互いに余所余所しくなっていたよね・・・

君を思う気持ちに蓋をして、同じクラスの子を気になるように好きになるように気持ちをその人に向けていった。

中学時代には、綺麗な彼女がいつもいて、

私は見なかったふり、聞かなかったふりをして、

君の事を忘れるように部活に励んだ。

他の人を好きなるように努力をしながら・・・でも、その人も好きと言葉ではいくらでも言えるけど、心が共なっていないことに気づかれたのかな、つき合うまでには発展しなかった・・・

高校時代は、別の学校に進学した為に、滅多に顔を合わすことが無く、

会ったとしても、すれ違うだけ・・・

私も、学校の友達を通じて彼氏を紹介して貰ったりしながら、徐々にだけど、君の事を想わないように、気にしないようにしていたんだよ・・・

短い期間で別れてしまい、「次、紹介をしようか？」と友達に言われた。でもね、心の奥の小さな灯が拒否するので断り続けたんだよ。

高校2年の冬辺りから、夜、犬の散歩で出歩いていると、よくすれ違ったね……。

ねえ知っていた？

気づいていた？

あの頃は、まだ君の事が気になっていたんだよ。

バイトの帰宅時間に合わせて、犬の散歩をしていたなんてしらなかったでしょう？

でもね……、君を想うことに蓋をして頑丈な鎖で封じ込めてしまったので、自分の気持ちがわからなくなってしまった。心の奥底に小さな灯はついていたのにね…。

そのまま時間が過ぎ、高校を卒業をして、君は上の学校へ、私は会社勤めを選んだ……。

<<【続】

## 想い（後書き）

誤字脱字がありましたら、教えて戴ければ幸甚です。

くくく (前書き)

前話から、少し時間が流れて・・・  
想いを告げずに、そのまま進んでしまうのか、  
すれ違ったまま時間は過ぎてしまうのか・・・

働きはじめて、あっという間に時間が過ぎた――・・・

2年目に入り新しい部署に行かされて、やっと慣れてきた頃、

会社の近くに、C a f e が新しくでき、

中で働いている人で、イケメンの人がいるよ。と、近所にある、他会社の女性社員も噂になるほどだった。

イケメンの人を一目見たいという、同期の女性社員に私は断ったが、両腕を持たれ引きずられてC a f e に向かうことに・・・

私は、滅茶苦茶不機嫌で、「イヤだって断ったのに……。」と小声で文句を言っていると、奥の方から女性の団体様が出口に向かって歩いていった。

案内されて席に座り、同期の女性達は、ソワソワしていて・・・

私は興味が無いので、店内をキョロキョロと見まわしていた。

内装は好みだったので、一人でも来れるかなーと、内心想っていると、

周囲の女性達がザワザワし始めた。

私は、この騒がしさが無ければ良い雰囲気なのに・・・と物想いに

耽っている、

周りにいた同期の友達が

「キヤー、こっちに来るよ〜?」

「イケメンだね〜」とザワザワ・・・

私はあまりの五月蠅さに辟易して、顔を背け窓の外をボンヤリと見ていた。

「…な、か…な…?かゝなっ!」と自分の名前を呼ばれていることに気づき、

「なに?」とボンヤリながら、友達に答えると…

「えっ!加奈か?!」と男性の声が聞こえ、そちらに視線を向けると――

私は、男性の顔を見た瞬間、ボーっとしていた意識が一気に覚醒した。

ゝ2ゝ（後書き）

誤字脱字ありましたら教えて戴ければ幸いです。

### 第3話

びつくりして、ボーーとしている私を見て、クスッと笑った男性…

それは…

その人は…

中学時代、君の事を見ないようにしていた時間に、目を向けていた人だった。

「な…なんで？」

「なんで？」

「ここにいるの？」

「んっ、バイトしているんだ〜。」

「……」

「どした？」と声を掛けられた時、

周囲に居た同期の女性達が興味深々で聞いてくる。

「知り合いなの？紹介して？」って…

私は何と言っていいかわからず戸惑っていると…

男性の方から、

「高橋です。えっと…か…、田川さんとは、中学時代の同級生なんですよ。」と笑顔で言った。

同期の人達から、

「え〜〜っ！加奈ちゃん何も言わなかったよね。知らなかったの？」

「…連絡取ってないし…。知らんわ。」と小さな声でボソツと言うと、

聞こえなかったのか、聞いていないふりなのか、

同期の人達が、高橋君と喋りはじめた。

少し時間が経ち、

昼の休憩時間10分前だということに気づく…

同期の彼女達が高橋君を引きとめていたので、奥から責任者なのか男性が出てきた。

その男性に気づいた高橋くんが、私の座っている席の横にたち、お辞儀をする角度で顔を近づけ耳の傍でこう囁いた。

「吃驚して、気絶するなよ。」って――

私は、頭の中に疑問符を浮かベキョトンとしていると…、高橋君はニヤリと笑った。

高橋君の後ろから呼ぶ声が――…

なぜか、記憶に残っている男性の声で…、

私は高橋君に言われた通り、吃驚して少し真っ白になっていた。

男性が近くに来た時、高橋君の影で私が座っていることに気づくと、

「ようやく来たのか…。」とため息をつきながら言う男性に、

私は、心の中で、なんで？ここにいるの……っ！！と叫んでいた。

【続】

### 第3話（後書き）

誤字ありましたら指摘していただければ幸いです。

**\* 4 \* (前書き)**

前話からの続きです。幼馴染の名前、こちらで先に出せた・・・

\* 4 \*

2年ぶり？の突然の再会に驚いて、  
口をパクパクしてしまった私を見て、

「金魚みて つ！」と爆笑している幼馴染こと“広瀬一史（K a z  
u s h i H i r o s e）”

「笑いすぎだぞ！」と注意する高橋くん、

周囲の興味深々の顔から逃げるように、レジに向かい――

会計を済ませて先に店の外に出た。

昼休み終了ギリギリで会社に戻った私を見て、一緒にランチした同僚は話しかけたくてウズウズしているらしく…

帰社時間になっても仕事をしている私を見て「残業なんて明日でもいいんでしょ？話聞かせてよ。」と言って、周囲を囲まれ逃げられないように更衣室に連れて行かれ…

更衣室で、あの二人は同じ中学の同級生と答えた。

「紹介をして？」と言われたが、

『連絡先も知らないので無理です』と言うと「使えね〜」と言われる。

私は、またか…と心の中でため息をついた。

**\* 4 \* (後書き)**

お気に入り登録ありがとうございます。感謝感激です。  
頑張って更新しなきゃと思っています。

**\* 5 \* (前書き)**

じれじれしています。

\* 5 \*

数日後――

会社が盆休みに入り、実家に帰った私は暇を持て余していた。

隣市にある映画館に行ったり、近くの本屋に行って気になっていた文庫本を何冊も買い込み家に帰って読みふけてみたりしていた。

一史は、バイトが忙しいのか実家には帰ってきていないらしいことを、母親から聞かされた。

休みが残り2日になった朝、7時に携帯が鳴った。

携帯が鳴っていた時、ベットで寝ていた私は、寝ぼけて枕の傍を探すが見つからなくて電話が切れてしまう……

携帯の着信音ですっかり目が覚めてしまった私は、履歴をみると知らない番号なので間違い電話か何かだろうと思い、折り返しの電話はしなかった。

着替えようと思い、寝ている時にきていたパジャマを脱いだところで再び携帯の着信音が鳴った。

やっぱり見覚えのない番号なので、少し緊張して着信ボタンを押し、

よそいきの声で「も……もしもし？」と言うと、

「加奈？おはよう、一史だけど。」と聞き覚え声より若干低く聞こ

える。

「お、・・・おはよ。なんで一史が番号を知っているの？」

「ん、おばさんから聞いていた。」

「は？うちの親から？」

「おう、休みの間中暇を持て余してゴロゴロしているから、どこか連れだしてくれないか？つてな」

「・・・・・・・・」

「加奈、今日も暇なら外に出てきてくれないか？」

「今日も？」

「うつ、いやか？海に行く予定があるし、俺は#\$%&・・・し」

「なに？聞こえない。」

「な・・・なんでもいいだろう！と・・・とりあえず水着を持って下に降りてこいな。」と言って通話を終了してしまった。

行くと返事してないのに、普通言うだけ言って電話を切るか、とイラッとする。

イライラしていたが、そういえば水着を今年は買っていないな、と言うことを思いだした。

昨年の水着では流行遅れだけどどうしようかと、考え込んでいた。

それも上半身はパジャマを脱いだまま下着も付けていない状態で・

・

あんな恥ずかしい思いをするとは思ってもみなかった。

【続】

**\* 5 \* (後書き)**

誤字脱字・言い間違いとか見つけましたら、教えて頂ければ嬉しいです。

次回は、\*\*\*\*\*で目線が変わります。

**\* 5 - 2 \* (前書き)**

前話の続きですので、5 - 2とさせていただきます。R 15くらい？

\* 5 - 2 \*

\*\*\*\*\*

携帯を切った後、いつまでたっても降りてこない加奈に、イライラし始め…

玄関先で待っていた俺は、加奈の家のドアを開けた。

ドアが開いた気配を感じたのか、加奈のお母さんが出てきて「おはよう〜早いわね。一史くん来てくれたんだ。手間かけさせるわね。そのまま部屋へどうぞ〜」とニッコリ言われ、

「朝早くすみません。邪魔します。」と言い、そのまま廊下を歩き階段を上がり加奈の部屋へ向かう。

加奈の部屋の前へ立ち、深呼吸をしてドアを軽く二回ノックする。返事が無いので、「加奈、まだか?」と言いながらドアを開けると、着替えていたのか上半身裸で下着を持ったままの加奈が目の前に立っていた。

驚いたのが軽く目を見開いて・・・、口をパクパク。

俺は思わず?そのまま視線を胸の方へ向けてしまいー

加奈は「ぎゃあああ〜っ!!」と叫んだ。

俺は「うるせえ〜」と言い、加奈の口を手で塞ごうとすると、バシッと手を振り払われ、俺も力チンときて、その後はお約束??

「一史のエッチ、スケベ・・・」などなど俺の悪口のオンパレード・

しまいには遊びに行かないと言いだすので、宥めたり持ち上げたりしてもダメで、最後にはなんとなく脅しという手を使い無理やり連れ出した。

家の前に停めてあった車の助手席を開け加奈を放り込み、急いで運転席に座りロックをすると深いため息をついた。

「あゝ、疲れるゝゝ。こんな事でなんで体力使わなあかんねん。」  
と言うと、

「ご立腹中の加奈が「だったら誘わなければ良いでしょ。」と睨みながら言う、

このままだと、絶対に言いあいになると思った俺は、

「・・・・・・・・」無言で返す。

「・・・・・・・・」

「車出すぞ。シートベルトしろ。」と言うと

「わたし行くと言ってない。」と最後のわるあがき言うので、俺は助手席側のシートベルトに手を伸ばし、カチンとロックをした。

運転席に身体を戻し加奈を見ると、近づき過ぎたのか、耳まで真っ赤になって固まっていた。

\*\*\*\*\*

家の前に停まっていた車は、一史のおじさんの車で、助手席に放り込まれ（ヒドイ扱いだし…）、運転席に座りロックするとブツブツ言いだす。

わたしもムカついていたので、「だったら誘わなければいいでしょ。」と言い返すと、一史が無言になった。

わたしも気まづくなり黙っていると、

「車、出すぞ、シートベルトしろ」と言うので、ムカついたまま「わたし行くと行ってない。」と言うと、こちらに手を伸ばしてくる。

言い返してばかりいたから怒っているよね…。叩かれるのかなと思いがグツと瞼をつぶると・・・

フワッと温かい空気が傍にきて、フワリと優しいけどスツキリ系の男性的な匂いがして、薄く瞼を開けると一史の顔がわたしの肩の傍にあり、一史の腕がわたしの胸の前を通り身体の横でベルトを口ツクした。

わたしはそれだけでも緊張というか恥ずかしくなってしまう、耳まで熱くなったのがわかった。

一史は固まっているわたしを見て、緊張をほぐすように頭をポンポンと軽く叩かれ、前を向きエンジンを掛け運転し始めた。

運転中は、話しかけてはいけなかなと思ひ、窓の外をボーと

見たり、運転中の一史の横顔をみたりキョトキョトしていると、「落ち着きが無いな、緊張しているのか？」とからかってくる。

「一史の運転って初めてだし、ちょっと緊張する」と言っていると、

「加奈の運転よりまし・・・」と言う、ムツとすることを言われたがスル　してやった。

住んでいる場所から、南下して某自動車道に入ると、

今日、行く場所が同じ大学のサークル仲間でグループ交際で海にいくことになったが、一史はフリーなのでわたしを連れて行くことになったと聞かされた。

同じサークルに好みの女性はいないの？と聞くと、‘好きな人があるし、その人だけと思っているので付き合いたくない’と言う、好きな人がいるんだったらその人を誘えばいいだろうと思った。

【続】



**\* 5 - 2 \* (後書き)**

あれ、進まない…、視点がコロコロ変わって読みにくかったらごめんなさい。

次回は、海〜

誤字、言い間違いが見つかりましたら教えて下されば嬉しいです。

**\* 6 \* (前書き)**

海到着です。時期外れでごめんなさい。  
いつもより長いです。

\* 6 \*

海水浴場について、待ち合わせ場所に着くと、一史と同じカフェでバイトしている高橋クンと、知らない人ばかりだった――

一史と高橋、同じ大学の友達の男3人で、大学の同じ学部の女性3人とわたしで女が4人…。一史が誰も連れて来ないと思ったらしく、気を利かせて声を掛けたい…

わたし一人、余計だし邪魔だよね…と思っていると、

大学の友達と先に歩き出した一史が、少し離れて遅れ気味に歩いているわたしに気づいたのか、高橋クンに何か言って、こっちに向かって歩いてくる。

一史の後ろに見える、同じ大学の女の子達がわたしの方を見て、ヒソヒソ話しているのが見えた…。それを見て、イヤだな…もうメンドクサイし帰りたいし…と息をついた。

「か…な…?」

「…わたし、あぶれているし邪魔ものだし…、帰ろうかな…」

「だ…ダメ、だ。あいつらが、まさか連れてくるとは思ってなかった。」

「ふーん、そ…う…なんだ？」と言って睨むと…

「う…、う…ごめん。」と言って、なんかしょげている。

わたしより20cm高い身長なのに、罰が悪くて小さくなっている一史の姿を見て、犬が飼い主に怒られて、耳をぺたっと伏せて尾を下れている姿が浮かび上がる。

ヘタレている一史を見て、もういいや〜と思い、一人でクスクス笑っていると…

わたしの機嫌が直ったと思ったのか、近づいてきて腕をグイッと掴まれ、スタスタと先に歩いている友達に追いつこうと思っているのか、早めに歩く…

わたしは付いていくのに必死で、時々引きずられそうなる――

売店で、パラソルを借りている友人達に追いつき、一史がわたしを紹介する。

“幼馴染で、大切な人なので”…という言葉に、私は疑問符を浮かべてキョトンとしていると、何かを知っている高橋クンがわたしの方を見てニヤツと笑った。

一史が、別にパラソルを借りて、お友達さんの隣に立ると、わたしが水着を持って来ていないので、「荷物番をしているよ〜」と言っと、

「すぐ、戻るから」と言って、海の傍で遊んでいる高橋クン達の所に走って行った。

パラソルの影でひとりでシートに座り、ボーと海で遊んでいる一史達を見ながら、暑い〜うだる〜と思っていると、近づいてきた男性2人が声を掛けてきた。

暑さで機嫌が悪くなってきたので、適当に聞き流していると、高橋クン？が連れてきていた女性達がキャピキャピとはしゃいで近づいてきた。

知らない男性がいるのが分かり、機嫌がわるくなっていく、一史達男性陣――

声を掛けてきていた男性達が、キャピキャピモードの女性達に声を掛け始めるので、“うわー、軽すぎっ！”と思って見ていると、いつの間にか一史がわたしの傍に来ていて、「大丈夫か？」と気づかう。

「ん〜、大丈夫だよ〜」と言って、ニヘラと笑うと、

気が抜けたのか頭を軽く撫でた。

声を掛けてきていた男性達を追い払って、  
「お昼にするぞ〜」と言われ、海の家にゾロゾロと向かう。

わたしは、暑さでバテていたので、一史が食べていた焼きそばを、少し貰って食べてかき氷を食べた。

一史に大丈夫か？と気遣われながら、パラソルの下へ行く…

わたしをパラソルの日陰に座らせて、「ジュースを買ってくる。」と言って、海の家の方に歩いていき、姿が消えると…

隣のシートに座っていた一史の同じ大学の女性達が声を掛けてきた。

「広瀬君とどういう関係？」

「大切な人って、何？」矢継ぎ早に言う。

急に頭が痛くなってきて、声がワンワンと耳の中？頭の中で響き始めて、自分でもおかしいと感じ始めたとなん、急に胃がムカムカし始めた。

何も言わないわたしにイラッとしてきたのか、一人の女性が、「聞こえているの！？」と言って、肩を押してきて、わたしがそのままグラッとして倒れかけた…と思ったとなん、誰かに支えられた気がした。

わたしの名前を呼ぶ声が聞こえたが――

答えることができないまま、意識が沈んでしまった…

**\* 6 \* (後書き)**

キャピキャピって、死語？

あと、お約束？？

閲覧数5000超え、お気に入り25件超えていました。

評価もありがとうございます。

文章を投稿時に、何度も読みかえています。誤字脱字、言い間違いを見つけましたら、ご指摘をして下さい。感想も、お待ちしております。

\* 7 \*

意識が浮上してきて、瞼を開けると――

そこは――

わたしの部屋のベットのう上だった。

身体を起こそうとすると、フラツとするのでベットに再び寝転んだ。

ん？わたし海にいたのになんて？？イロイロと思い出しているとドアの外からコンコンと音が鳴り、わたしは「へーい」と返事をすると、

ドアが開き、

「なにが、 “へーい” だ。」と言い、少し心配そうな顔？をしながら一史が入ってきた。

一史がベットの傍の椅子に座ったのを見て、？？と頭の中に疑問符が浮かぶ。

「具合どうだ？」

「んー、少しクラツとする。」と言うと、額に掌を当ててくる。

いきなり顔を触られることに慣れないので、片眼をしかめていると、

「少し熱いくらいか…」

「熱い？わたし風邪だったの？？」

「誰が風邪だって！」と少し大きな声を出いた一史に驚くが、声が頭に響いて痛みが出てきた。

痛みがあるので、一史の説明を聞いていると、

海で倒れたわたしを、一史が近くの救急病院に運び、軽い熱中症と診断され、点滴をして、終わって帰宅し・た・ん・だ。

以前から体調が悪いとか無かったか聞かれ、暑さでバテていたと言つと、軽ーくため息をつかれた。

「体調が悪かったなら、朝、会ったときに言えよ。」と言つので、  
「強制的に連れだしたくせに…、言う暇なんてどこにありましたっけ？」と答えると

「はいはい、俺がわるーございました。ごめんなさい。これでいいか？」と言つので、

頭の痛みとかでしんどくなっていたわたしは、

「……………もう、いい…」と言つて、一史に背を向けてタオルケットを頭までかぶった。

「かーな？かなさーん、加奈ちゃん」とわたしを呼ぶ声にシカトしている

はあーとため息をつかれ、暫くお互いに無言になる。

少し時間が経ち、もぞもぞとしてケットから顔を出すと、ジロツと睨まれる。

「な…なに？」

「いや…、なんでもないわ。」と言つて、再びわたしの方に手を伸ばしてきて、頭に手を置き、クシャクシャとかき回した。

「な…なにをするんだ」と言っと、  
クッククク・・・と笑い、「帰るわ。」と言って、椅子から立ち上がる。

「え、えっと、か…一史、今日は、海に連れて行ってくれてありがとう。良い気分転換になったし、おまけが付いたけどね。」と苦笑しながら言っと、

「加奈が、良いと思ったらいいんじゃないの？」と笑いながら言っ

「またな」と、わたしの方を見て言い、ドアを開けて出て行っ

次の日は、夏休み？（盆休み）が最終日なので、明日からの仕事に、差し支えが無いように家でジツとして体調を元に戻すことにした。

普段通りの生活に戻り、

カフェで、高橋くんや一史の姿を見かけるが、バイトしている時にはお店に入らず。人が多いしー

大学の講義がある日はないので、その時には2人のファン？がないので、五月蠅くないし、お店に入る。

海に行った後から、避けていたのもあるし、久しぶりに話が出来たのは、月末の×日で遅くまで残業しているときに、軽食を一史が

バイトしているカフェに頼み、一史や高橋くんが持ってきてくれた時に、少しだけお喋りをしてただけだった。

その時に、高橋くんがファン？の人達と携帯のアドレスとか教えていたのかな、

恐怖の残業日が過ぎて、少し時間がった頃に、合コンをするので参加しろ同期や先輩方に言われたー

**\* 7 \* (後書き)**

少し飛ばしました。割愛しすぎ？

誤字脱字が見つかりましたら、ご指摘して下さい。読後の感想もお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2936u/>

---

優しい嘘

2011年10月6日14時51分発行